

活動タイトル	貧困の中で生きる子どもたちに多様な学びの機会を	団体名	NPO法人ビーンズふくしま		
<p>1年間の活動（アウトプット）の目標（事業全体）</p>	<p>1、各種イベントの計画・実施（季節行事等 年2回） 2、体験、宿泊学習の計画・実施（年2回） 3、学習支援・食育学習・各種講座の計画・実施（年4回） 4、各地域との情報共有、必要資源の整備の計画・実施（年12回） 5、各地域、子ども支援団体等への貧困対策に必要な支援のノウハウの研修会等（年6回）</p>		<p align="center">■ 活動風景</p>		
<p align="center">■ 活動報告</p> <p>【事業1：子どもの貧困対策支援事業（生活困窮家庭の子ども対象）】 2018.10 宿泊学習 2018.12 クリスマス会 2019.1 スポーツ活動 2019.3 食育学習 2019.5 集合型学習支援 2019.6 食育学習 2019.7 性教育講座 2019.8 宿泊学習</p> <p>【事業2：地域孤立改善事業（各市町村の担当窓口、子ども支援団体対象）】 2018.9～2019.8 ケース共有、ケースカンファレンス、勉強会等を毎月開催（年間12回）</p> <p>【事業3：アウトリーチャー育成事業（各市町村担当窓口、子ども支援団体対象）】 2018.10、12、2019.2、4、6、8 子ども支援に必要なノウハウ提供のための研修会、アウトリーチャー育成研修会を毎月1回（年間6回）</p>	<p align="center">■ 1年間の目標に対する達成状況</p> <p>【事業1】 活動内容に関しては、利用予定であった施設や子どもの参加人数の都合で、当初の活動計画と若干の内容変更は生じたが、2ヶ月に1回程度の活動開催については目標を達成できた。受益者の成果目標に対する達成度も当初目標5人に対し、活動に参加した子どもの9人が自立心が育まれたと評価しており、目標は達成できている。</p> <p>【事業2】 地域孤立改善事業として、子ども支援に必要なノウハウの蓄積、各地域の資源整備等を目的としたケース共有、ケースカンファレンス、勉強会等は目標回数を達成できた。しかし、各地域の資源整備に関しては、実働を伴うには数年単位の期間が必要と見込んでおり、当初予定の20%の達成には至らなかった。実働に向けて動き出している地域もあり、今期達成率は15%とした。</p> <p>【事業3】 県内、近県、その他連携している子ども支援団体にてアウトリーチャーを現段階より5名増員することを目的にアウトリーチャー育成のための各種研修会を目標通り年6回開催できた。しかし、各地域の高齢問題や子ども支援に携わる若手スタッフの人材不足等により、当初目標の5名増員には至らなかった。</p>	<p>集合型活動（宿泊学習）星空観察の風景</p>			
		<p>市町村・子ども支援団体への子どもの貧困対策支援ノウハウ蓄積のための研修会</p>			
■ 1年間の活動のまとめ	■ 事業を通じて得られたノウハウ	■ 実施した人材育成策	■ 活動成果のアピールポイント（自由記入）		
<p>本助成金を活用した1年間の活動を通し、子どもたちへの多様な学びの機会を確保できたことで、子どもたちが日常的に抱える問題や、それらの解決に向け、どういった関わりが生活困窮家庭の子どもたちの自立心を育むのか、という課題について、分析し整理することができた。</p> <p>事業2、3等の社会基盤を整備していく活動や人材育成に関しては、エンドユーザーである子どもたちの実状を深く理解し把握することが最も重要なことと考えており、事業1の活動で得た子どもたちの様子を丁寧に各市町村担当窓口や、子ども支援団体へ情報提供し、勉強会等を開催することで、地域の孤立問題を改善する必要性を広めることが出来、また地域での孤立問題を改善していくために必要な人材とは、という視点で人材育成について考える機会にも繋がり、より、アウトリーチャーの必要性が浸透した。</p> <p>この事業を通して、最も重要なことは、対人支援の仕組みとして、支援事業の組み立てをしていく際のミクロからマクロへの繋がりが、どの程度エンドユーザーに適切に反映できる取り組みなのか、という視点を持つことであり、それらを達成できたことは次の対人支援のストラテジーに必ず活かすことができる。</p>	<p>生活困窮故に劣悪な環境で日々の生活を送り、生きる力が低下した子どもたちに必要な支援とは、支援者側のスキルと併行し、受援者側の受援力も求められる。そのためのノウハウとして、アウトリーチを通し、受援者である子どもたちに丁寧に寄り添い、支援者側が子どもの力を信じて待つことのできるスキルを身に付けていくことが必要である。この、子どもの力を信じて待つということは、非常に難しく、支援者側は、子どもたちに生きていくための答えを準備し、生きていくための道を整備し、生きていくための必要物資を提供しがちであるが、子どもたちの自立に必要なことは、どんな困難も受け止め、その中で感じた困り感を発信し、助けを求め力をつけていくことである。その力を子どもたちが身に付けた時、初めて支援者側は子どもの困り感の真意に辿り着ける。</p> <p>それまでは、子どもたちの力を信じて待つこと＝エンパワメントの視点を養い、子どもたちが抱える困り感の真意に辿り着くための丁寧なケースワークが重要である。当該事業は、1年間、共にケース共有や勉強会等を実施した各市町村担当窓口、子ども支援団体のスタッフに、子ども支援に必要なエンパワメントの視点をより充実させるための事業として確立できた。</p>	<p>1.各市町村担当窓口、子ども支援団体のスタッフが、生活困窮家庭の子どもの実状を把握するためのケース共有等</p> <p>2.1を通し、子どもの貧困対策支援に必要な支援策、人材の理解を深めるためのケースカンファレンス、ケース検討会</p> <p>3.貧困の中で生きる子どもの実状を社会問題と理解し、地域で孤立していく状態を改善するための仕組みとして資源の整備、拡充を目的とした勉強、研修会</p> <p>4.子どもたちが自らの手で自分の人生を切り開いていく力をつけるためのケースワーク、パーソナルサポートを充実するために必要なアウトリーチャーを育成するためのYCW研修会</p>	<p>この1年間の活動を通じて</p>	<p align="center">事業1、2、3を通し、子ども支援に関わるミクロからマクロへの連動支援活動を</p>	<p align="center">を達成しました。</p>
<p align="center">■ 受益者の変化（効果測定結果等）</p>			<p>【事業1】 他者と関わることを拒否していた子ども、他者の意見を尊重出来なかった子ども等、子ども社会の中でコミュニケーションを図ることが難しい子どもたちが、子ども同士の関わりの中で、他者の意見を尊重したり、思いやりの気持ちを持つことができたり、自分を取り巻く環境に違和感を持ち始め、困り感を発信する等、自立心を確実に育むことができた。</p> <p>【事業2】 当該事業を通し、地域の中で子どもたちを支えていく仕組みを創るために、地域資源を整備、拡充することの必要性は浸透し、自治体为主导で子どもサポート事業を立ち上げ、当法人をアウトリーチャーのノウハウを蓄積するための嘱託員として任命する等、実働に向かう取り組みを始める自治体が増えてきた。</p> <p>【事業3】 アウトリーチャーの増員について、目標達成には至らなかったが、アウトリーチャーの必要性、重要性の理解は浸透し、実際にアウトリーチャー事業を開始した団体においては、合同での勉強会開催申し込みや、Svの依頼、合同ケースカンファレンスの実施等、アウトリーチャー増員のみならず、アウトリーチャーのスキルアップを目指す団体も増えてきた。</p>		